

## 最も短い詩としての俳句の性格（I）

山口青邨

俳句は五七五調の十七字詩である。このことに就ては私は宿命論者である、十七字の詩といふことは俳句のもつ宿命である、十七字ではいけないと言はれても仕方がない、そんなちっぽけな形では滅びる――とおどかさされても仕方がない、こんな調、こんな形式は、俳句のもって生れた性質なのである。お前は丈が低いとか、色が黄色だと言はれても、今更どうにも仕方がないのである。

俳句は十七字詩として今日存在してゐる。これををその根源にさかのぼって、俳諧連歌にまでもって行けば百韻でも千韻でも、幾らでも長くすることが出来る、或る人は俳句はこの時代に歸るべきだといふ、然し私はそんなことは俳句の生きる道とは思えない。

山口青邨著『俳句入門』より抜粋